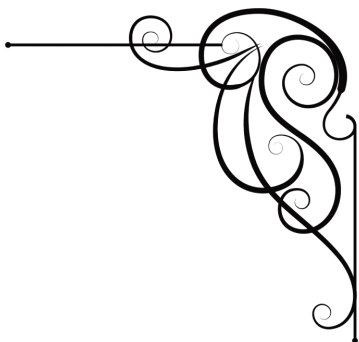
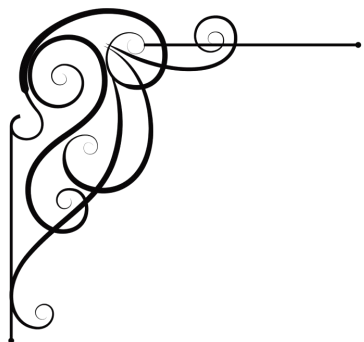
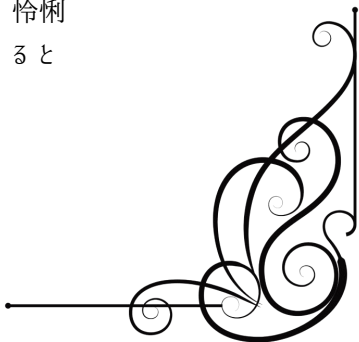




恩讐の 貴方に

著者 : 池田 伶俐

イラスト : 藤岡 ると



登場人物紹介



東郷 仁志
(とうごう ひとし)

☆年齢 43歳／属性 受／身長183cm／体重80 kg
オールバックの黒髪、穏やかな表情だが威圧感は半端ない。
広域指定暴力団桜星会のNo. 2であり、初代組長の孫。
資金源の会社経営は殆ど彼の手腕である。
死んだ元組長の愛人として権力を握っていた。
学生時代は格闘技の手誰であり組長の護衛も任されている。



高坂 太佑
(こうさか たすく)

☆年齢 27歳／属性 攻／身長180cm／体重78kg
真っ直ぐな茶色の短髪、無精ひげの目元はすっきりとしたイケメン。
組織犯罪対策第三課に配属された刑事。
父親を桜星会の組員に殺され、犯人を追っている。
桜星会の実力者である東郷を尾行して、不正取引をさぐろうとしている。

第一章 開花

縦縞のスーツの男は、明らかにそのスジの者と分かるいでたちの男を中へ促した。

VIPルームの重厚な防音扉の中は、シャンデリアが煌びやかに照らされた豪華な接待室だった。

「飯島さん、結構いい具合に仕上がってますよ。あの坊や」

兄貴分に当たるとその男に彼は頼まれた仕事の報告をすると、扉の脇に立っている店のオーナーの男へ手をあげ、接待の準備をするように指示した。

彼から預けられた男は見目の良さと飲み込みの良さからか、稼ぎ頭になつてるといふ追加の報告もすると、満足そうに聞く飯島に媚びる様な視線を向けた。

「相変わらず、高坂のシノギの手際には不安はないな」

飯島は頷いてねぎらいの言葉をかけ、高坂と一緒にVIPルームの中へと入っていく。

店のボーイは間髪をいれずに、椅子に座る飯島へとグラスを差し出しタイミングを見計らいながら料理を並べていく。

そこへ先ほどの店のオーナーとおぼしき人物が部屋に戻って来た。

「飯島様、ご苦勞様です。高坂さんが紹介してくれた子は、非常に稼いでくれて助かってますよ」

手にしていたシャンパンのボトルの栓をぼんつと引き開けて、オーナーは自らグラスへとくとくと注ぎ入れてもてなした。

「そうだな。是非とも彼の具合を見たいのだが、呼んでくれるか

な」

ここは知る人ぞ知るSM倶楽部であり、ヤクザである桜星会の息がかかっている。

ここで稼いでいるということは、そういう意味での売り物になっているということである。

飯島がグラスに口をつけてから告げると、オーナーは間髪を置かずにフロントへと内線をかけた。

こういった対応は瞬時におこなわなくてはならない。

非合法な店であるが、警察などに通報がいかないのも裏組織と繋がりがあつてのことである。

「呼び出しましたので、少しお待ちください」

ちらりと様子を窺いながら空になったグラスへシャンパンを注ぐオーナーに、高坂は満足そうに頷いた。

「羨ができてないと、後々困るのですね」

「しかし……育ててから、お引取りになるといふのも珍しい話でびつくりしましたよ。高坂さん」

「アレは元々は先の買い取り先があるモノなんですね。しっかりと羨けてくれないと困る」

オーナーの言葉に高坂は答えず、代わりに横から飯島がグラスを傾けながら機嫌良さそうに答えた。

「失礼いたします……」

全裸に首輪を嵌めた格好で、犬のようにボーイに鎖を轆かれてやってきた若い男の姿を、飯島は推し量るように顎をしゃくって

見つめた。

欲情しきった体は媚薬を飲まされたのか塗られたのかしたのたろう。

彼はのろのろと脚を引き摺って、既に呼吸を荒く繰り返して床に伏している。

震える肌は滲み出る汗に濡れ、股ぐらの狭間にある肉棒は張り詰めてらてらと照らされた光に反射している。

「……ほう。これが新しいマゾ犬かい」

僅かに開いた太股からたらたらと粘液を滴らせていて、だらしない姿を晒している姿を眺めて、飯島はちろりと舌で唇を舐めた。

高坂を通じて彼の様子をこの店へ頼んだというのに、飯島は彼を見るのは初めてだという様子だった。

足元に臥して荒い呼吸を繰り返す彼の顎先を摘んで、確認するかのように無理矢理顔を上げさせた。

男らしく整っているであろう顔立ちも打ち消すほど、目はとろんとしていて焦点が合っていない。

熱に上気した表情で、閉じることができないのか、開き切った唇からは唾液が滴り落ちていた。

この東郷仁志という男は、飯島の属する『桜星会（おうせいかい）』の会長の孫である。

会長の長男だった澤口清仁は、一般家庭の女性と恋に落ちて駆け落ちをした。暫くは平穏に暮らして子供をもうけたのだが、組員に見つかり夫婦は心中してしまったのだ。

そして、飯島は女性の両親が引き取って育てていた彼を見つけたという情報を得て、組長へ報告をした。

組長は、彼の叔父にあたる男である。ただ、自分の息子が病弱なこともあり、彼の出現で組の内部が割れて抗争になることを畏れた。そこで、飯島に手を打つように命じたのである。

普通の家庭で育てられていたというのに、彼にとつては可哀想なことだが、要らぬ内部抗争は組の弱体化に繋がる。

……まあこのザマを見れば、血統は良くともこの男をの組の跡目に据えようとは思わぬだろう。

ここまで堕ちた男はすでに男ではない。

まあ、このままでも充分だが念を入れておいた方がいい。

「ええ、新入りですが欲深くてね。ほーら、見てください、すっかり可愛がってもらえると期待していて、尻尾を振ってる根っからのイヤラシイ犬ですよ。飯島さん」

オーナーは自慢げな口調で言葉を掛け、軽く彼の尻をつま先で蹴り上げた。

「ウ……ウウウ……アアあ……ッ、ッくう……う」

ブルッと身を震わせて、彼はその刺激に堪えることも出来ずに逐情を果たす。

白く濁った液体は、ビシヤッと床に飛び散り床を汚した。

伏せられた毗からは涙が浮かび、男の劣情をそそのかのように唇が僅かに震えを刻んでいた。

「なんてことだ。見られてるだけで、許しも請わずに一人で出し